



HOKKAIDO
UNIVERSITY
EUROPE OFFICE

北海道大学欧州ヘルシンキオフィス ニュースレター 第2号 2021年 秋/冬



ヘルシンキ大聖堂とクリスマスツリー

1. 随想録

今年の日本の夏は記録的な猛暑でした。札幌においては、1924年に17日連続の真夏日を記録したところ、97年ぶりに連続記録を更新しました。12月に入り降雪も観測され、猛暑の夏が遠い日のように感じます。札幌は人口約200万人を数える大都市でありながら豪雪地帯に位置しています。また、ヒグマの生息地である山々とも隣り合わせであり、冬眠前は居住区においてもヒグマの出没が度々報告されています。札幌市のような都市規模に対するこうした

自然環境は世界的に見ても珍しいようです。札幌市の北緯43度に対してヘルシンキ市は北緯60度と高緯度に位置しますが、バルト海や北大西洋海流の影響でヘルシンキ市の冬の寒さは緯度ほどではなく降雪量も多くはありません。しかし、湿度が低く爽やかな北海道の気候は北欧諸国の気候と似ていると感じます。

気候は人々の暮らしに影響を与え、人々の気質を育むと言われてきました。例えば、フランスの思想家シャルル・ド・モンテスキューは1748年に著した「法の精神」の中で、地理や気候がどのように人々の精神や人間社会・文化の

形成に作用しているのかについて論じました。また、ドイツの地理学者フリードリッヒ・ラッツェルはチャールズ・ダーウィンの進化論の影響を受けて、1891年に「人類地理学」を著し、自然環境の強い影響を受けて人間活動に地域性が生じるという環境決定論を提唱しました。このような自然地理学と人文地理学の融合的解釈は後に論争を巻き起こしましたが、自然環境のみならず社会環境が私達の思考や活動に影響を与えると考えることは科学的に不自然ではありません。私達は、五感や様々な感覚器を通して周囲の情報を常に感知し脳内で信号処理しており、これにより思考や行動に影響を受けるのです。

大学生時代に読んだとある本(出典失念)に、“ドイツには深い森(黒い森とも言われる)が多くある。森の中から何が聞こえてくるのだろうかとうと耳を傾けることで多くの音楽が生まれた。一方、フランスは広大な牧歌的風景が広がっている。この美しい景色を描きたいとの思いから多くの絵画が生まれた。”との記述があったことを思い出しました。ドイツは、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンなどの著名な作曲家を数多く輩出しました。フランスは、クロード・モネ、ピエール・オーギュスト・ルノワールなど数多くの印象派画家を輩出しました。もちろん両国とも著名な作曲家や画家それぞれを多く輩出していることは言うまでもありません。音楽や絵画に代表される芸術作品は人間の素晴らしい創造物であり、作者の感情、思考、想像力が結晶化し表現されたものです。私達は作品鑑賞を通して作者のそれらを時代を超えて疑似体験し、多くのアイデアを得ています。気候のみならずそこで生み出された芸術も私達自身を育てているのです。まさに自然・人間・社会は相互に循環しており、自然科学と人文・社会科学の連携・融合が超スマート社会(Society 5.0、

内閣府)の実現においても強く期待されてるところです。

中国の陰陽五行思想では、人生を4つの色と季節で言い表しました。10代半ばから30代前半までを「青春」、30代前半から50代後半を「朱夏」、50代後半から60代後半を「白秋」、60代後半以降を「玄冬」と表しました。季節は毎年巡りますが、人生の四季は一度だけです。青い春の後には、瞬く間に朱い夏が訪れ、誰にも等しく白い秋となりやがて深みのある玄冬を迎えます。北海道小樽市にゆかりのある詩人、伊藤整は著書「青春、1960年」の中で、“人の生涯のうちいちばん美しくあるべき青春の季節は、おのずから最も生きるにむずかしい季節である。”と述べました。朱夏、白秋、玄冬には青春に優美さを譲ることはあってもそれぞれが力強さと魅力に溢れた季節です。気候が人々の気質を育むように、人生の季節もまた人々の気質を育くむのでしょう。窓に映る雪景色を見ながら、人生の朱夏を全身で感じ、“贈り物”である今日という日を大事にしたいと思います。最後に以下の言葉を引用します。

The clock is running.

Make the most of today.

Time waits for no man.

Yesterday is history.

Tomorrow is a mystery.

Today is a gift.

That's why it is called the present.

In “Sun Dials and Roses of Yesterday: Garden Delights, by Alice Morse Earle, Historian, USA, 1902”.

大橋 俊朗

所長、北海道大学欧州ヘルシンキオフィス
教授、北海道大学大学院工学研究院

2. 同窓生便り～北海道大学での思い出～

毎年秋になると、私は冬の最初のサインが待ち遠しくなる。それは何かの香りではなく、初雪が降った、という札幌からの知らせである。雪で覆われたクラーク教授の胸像を見ると、冬が来たことを私は知るのである。

それは全て二十年以上前、私が日本へ行くことを決め、北海道大学の獣医学部に入った時に始まった。

北海道大学で学部一年生を始める前、MEXT 奨学生として私は東京外国語大学で一年間を過ごした。ついに札幌に着いたとき、私は二つのことに気づいたのであった：札幌の街のサイズが「ぴったり」に感じられたこと、道で会う人々が首都よりもはるかにリラックスしていて、社交的であったこと、である。これは特に私のクラスメートにあてはまり、彼らは皆日本人であったが、そのほとんどが道外から来ており、故郷から離れて暮らし始めることに共感を抱いてくれたのであった。彼らと一緒に、農場の納屋での霜が降りた早朝から北大寮歌を歌った深夜まで、私はまさに北大獣医学生となれたと感じたのであった。

私は、石塚真由美教授の毒性学研究室で博士課程を過ごし、そこで北海道大学がいかに国際的であるか、その国際的な学生コミュニティがいかに強固であるかを体験する機会をえた。獣医学部では、獣医学への愛を共有する世界中から来た外国人学生と知り合うことができたし、キャンパスでは、毎年北大祭で見られるような、マルチナショナルなコミュニティを体感できた。

しかし、札幌での生活は学びだけではなかった。札幌は、私の大人としての歩みが始まった場所であり、私の子供たちが生まれた場所でもある。札幌は、私がいまだ「故郷」と呼ぶ街なのである。

また、私は様々な調査旅行やインターン

シップの機会を持つことができ、それがハンガリーの医薬品開発業務受託機関の研究ディレクターという最初の仕事へとつながった。

現在、私は Syngenta Inc. 社の技術専門家として、急性・発生・生殖毒性と内分泌かく乱物質の研究に携わっている。それは奇しくも、藤田正一名誉教授が北海道大学で毒性学研究室を設置した時に歩んだ道をたどっていることになる。

北大同窓生となることは、充実した会話のきっかけになるような一行を CV に書けるようになるだけではなく、大きな、国際的な家族の一員となることであり、札幌を再び訪れたときに、常に故郷にいるような気分になれることを意味するのだ。

Dr. Balázs Oroszlány, London, UK

3. 北大協定校の最新情報

3.1 ヘルシンキ大学の SDGs の取り組み

2021年8月1日に、総長を機構長とする「サステナビリティ推進機構」が設置され、SDGs 事業を推進する本学の動きはさらに加速された（本学の SDGs への取り組みについては、<https://sdgs.oaic.hokudai.ac.jp/>を参照）。

協定校であるヘルシンキ大学も 2018 年 1 月に Helsinki Institute of Sustainability Science (HELSUS) を立ち上げ、人文学・法学・理学・教育学・社会科学・薬学・生物環境学・農森林学の 8 つの学部から代表的な研究者を集めて研究・教育活動を展開している。HELSUS は特に、「消費と生産」「Global South」「北極」「都市」「理論と方法論」の 5 つの研究テーマを通じて持続可能な移行の問題にアプローチすることを掲げている。

さらに、一般向け講演や SNS での発信、独自の教育プログラム（全学生が参加できる Multidisciplinary Environmental Module）・修士課程プログラム（Environmental Change

and Global Sustainability と Urban Studies and Planning プログラム) を 2021 年に開講し、社会へのフィードバックにも力を入れている。

3.2 ブレーメン大学創立 50 周年・協定締結 10 周年

2020 年は本学とブレーメン大学が協定を結んで 10 年となる記念の年であり、2021 年はブレーメン大学創立 50 周年の節目の年である。それを記念して 2021 年 12 月にブレーメン大学にて北海道大学交流デーが開催される予定であったが、対面開催を期して 2022 年度に延期された。これに向けて、ブレーメン大学から提供された最新情報を以下に紹介したい。

ブレーメン大学では現在、120 以上の国・地域から約 23,000 人の学生・研究者・職員が活動している。深海研究から宇宙まで約 100 の学位取得プログラムがあり、この大学での科目・専攻選択は多様である。ヨーロッパを代表する研究大学として、本学は世界中の大学や研究機関と協力関係にある。

国際性は本学の特徴を示す重要な戦略的要素であり、全ての分野における活動に広がっている。国際的な大学として、私達はキャンパスに住み、学び、働く人々を世界中から受け入れている。彼らは私達の教育と研究活動を豊かにし、私達の成功の決定的要素である。

本学はこのことを認識し、それに従って国際的なネットワークを大幅に拡大している。2018 年より The YUFE (Young Universities for the Future of Europe) Alliance に加わっており、10 の大学と 4 のアカデミック外のパートナーが将来にむけて、最初のヨーロッパ大学を創設することに取り組んでいる。

気候変動問題の分野では、環境・気候研究の分野で世界を代表する 35 の大学からなるネットワークである The International



キャンパス内の桜 © S. Prangemeier

Universities Climate Alliance (IUCA) にドイツで唯一の大学として、設立過程から参加している。

近年の THE 世界大学ランキングにおいて、上位は英米の大学で占められているが、ブレーメン大学は 351-400 位に位置しており、ドイツの大学に限定すれば 37 位となっている。

創立からわずか 40 年で、本学は「University of Excellence」を授与され、トップレベルのドイツ大学として認められてきた。2012 年には、他のトップ 10 のドイツの大学と共にその戦略コンセプトが認められた。この「Weser の奇跡」と呼ばれる短期間での達成は、数十年にわたる高いレベルでの事業への取り組みと緊密な協力関係、明確な分析の成果であり、本学は優れた研究の道を歩み続けている。しかしながら、目標としていた 2 つの Clusters of Excellence を獲得することはできず、2019 年以降の「Excellence University」への応募はかなわなくなってしまったことは事実である。

とは言え、本学は現在、これまで以上に多くの DFG Collaborative Research Centers を有しており、これは 20 年以上前から始まっていた高度な戦略と研究分野の分析の成果である。ブレーメン大学は、国際的に認定を受けているため、教育において独立した質の高いマネジメ

ントを実践している。現在取り組んでいるのは、研究に基づいた学びと、革新的な新しい修士課程プログラムを設けることであり、これらもまた優秀な大学の特徴である。YUFE ネットワークの一員として、ブレーメン大学は未来のヨーロッパの高等教育を形成している。

(Bernd Scholz-Reiter 学長によるブレーメン大学の紹介)

<https://youtu.be/eZQZHGLII5k>

<https://www.uni-bremen.de/en/50ye>



トゥルク大聖堂とクリスマスツリー

4. ヘルシンキオフィスの活動状況

4.1 欧州協定校向け留学説明会開催

欧州ヘルシンキオフィスは毎年 9～11 月の時期に欧州協定校を中心に留学説明会を行っている。2021 年度もオンラインが中心であったものの、ハンガリーのブダペスト経済工科大学・ドイツのブレーメン大学の留学フェアに参加、さらにはミュンヘン大学やルクセンブルク教育省主催の留学フェアにも資料提供を行った。

また、主催者としてフィンランドの学生向けオンライン説明会を 10 月 21 日に行い、大阪大学欧州拠点・名古屋大学ヨーロッパセンター・京都大学欧州拠点・在フィンランド日本大使館からも参加いただいた。

約 1 年半日本への留学が難しい状態が続き、留学を希望する学生や関係者から諦めの声や専門・進路変更などが聞かれる中、70 人近い学生が参加し、奨学金や留学プログラムについて熱心に耳を傾けていた。

他にも、欧州に海外オフィスを持つ日本の大学ネットワークである JANET の 2021 年度フォーラム (筑波大学主催) に参加し、「ポスト・コロナ時代の日欧学術交流」について積極的に議論に参加した。2022 年度 JANET フォーラムは千葉大学主催によりベルリンのフンボルト大学医学部シャリテにて開催予定である。

4.2 JSPS スtockホルムとの合同説明会

2021 年 12 月 1 日にフィンランドの協定校の 1 つであるトゥルク大学にて、日本学術振興会 (JSPS) スtockホルム研究連絡センターと合同で日本向け留学・フェローシップ説明会を行った。対面とオンラインのハイブリッドで行われ、在フィンランド日本大使館からもオンラインで発表の協力を得た。

トゥルク大学側ホストを務めたのは東アジア研究センター (CEAS) であり、今年設立 15 周年となる、フィンランドにおける東アジア研究の中心である。10 月には記念セミナー「East Asia - The New Normal?」が開催され、台湾のデジタル大臣であるオードリー・タン氏や、本学北極域研究センターのユハ・サウナヴァーラ助教らによる講演が行われた。

フィンランドでは 11 月から新規感染者数が急増し、規制が再強化される中での開催であった。さらには、オミクロン株の拡大に伴う外国人の入国禁止の政府発表があったことは、日本への渡航を計画している研究者・学生にはショッキングなニュースであった。

それにもかかわらず、参加者は、日本政府奨学金や、JSPS のフェローシップ制度や本学の研究紹介・総長奨励金の説明に聞き入った。

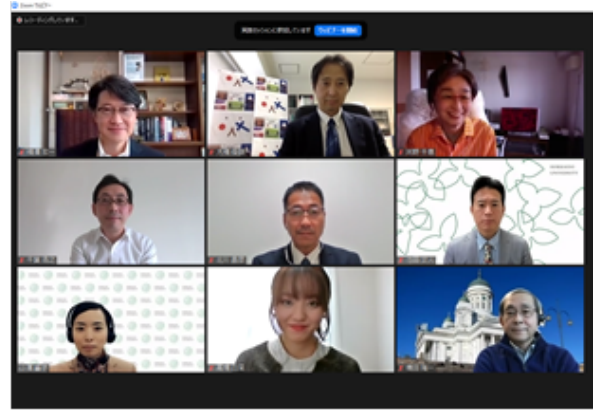


ラウリ・パルテマー所長による開会の辞

4.3 北大フィンランドディ 2021

2021年12月5日(日)に、第5回北海道大学フィンランドディが欧州ヘルシンキ主催で開催された。2020年度は開催中止となったが、今年度は初のオンライン開催となり、およそ160人の参加視聴者が本学・札幌内外と国外からあった。

当日は保健科学研究院の横澤宏一教授の司会により、大橋俊朗オフィス所長の挨拶に始まり、第一部では、高等教育推進機構の池田文人教授によるムーミン物語の分析、コロナ禍のヘルシンキで留学生生活を過ごした文学部生高橋日菜さんの体験談、そして理学研究院の増田隆一教授によるフィンランドでの研究体験が紹介された。第二部では、あらひろこさんと楽団サルミアッキによるフィンランドの伝統楽器カンテレと伝承歌が披露され、付属図書館の千葉浩之氏によるヘルシンキの新図書館 Oodi の紹介、最後に在日本フィンランド大使館の一等書記官ニーナ・ヴァイサネン氏によるフィンランドの環境問題への取り組みについての講演が行われた。



フィンランドディ講演者集合写真

北海道大学欧州ヘルシンキオフィス
ニュースレター 第2号、2021年秋/冬

編集：大橋 俊朗、岡部 赳大

発行日：2021年12月24日(金)

発行元：北海道大学欧州ヘルシンキオフィス

Fabianinkatu 26, Helsingin Yliopisto

00014, Helsinki, Finland

Tel: +358-44-2410608

E-mail: helsinki_office@oia.hokudai.ac.jp

URL: <https://www.hokudai.fi/>

Facebook: <https://www.facebook.com/hokudaihelsinki/>